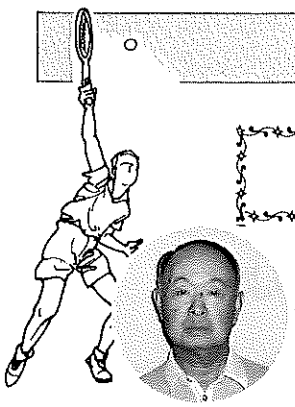
思い出に残る優勝

臨床眼科学会テニス大会



藤井　清太郎

〈北九州市・門司区〉

私がテニスを始めたのは昭和35年で、鉄道病院に勤め、門司港清見の鉄道宿舎に住んでいて、40歳の時だった。近くに小児科の吉田和世先生がおられて、ご指導をうけた。宿舎が清見の国鉄テニスコートや長谷の市営コートにも近かったので、出勤前、早朝にも練習した。その後、昭和40年に現住地の大里、高田町に開業したが、長谷のコートに早朝よく出かけたものである。九大眼科の大先輩であられる増田義哉先生にもご指導いただいたし、またプレーを楽しんだ。

大体私は運動神経が鈍い上に中年ではじめたので上達するはずは無かったが、それでも各地区の医師会対抗テニスや、全九州ドクターズテニス、眼科医会テニス等に、遠くは沖縄や札幌までも遠征した。昭和55年、大阪府江坂コートでの臨床眼科学会テニス大会で、内田先生と組んで優勝した事は、優勝経験の少ない私にとっては、特に思い出になる、うれしい事であった。

最近は体調やや不調のため運動から遠ざかっているが、そのうちに復帰してテニスの爽快さをまた味わいたいし、また子供達や孫たちとも家族テニスを楽しみたいと思っている現在である。

遂に連続50回出場

中島　教隆〈北九州市・門司〉

私が所属している北九州市門司区医師会のテニス部の歴史は古く昭和20年代に誕生しています。現在、門司区医師会はＡ会員 106名、Ｂ会員65名ですが、その内40名程が我がテニス部に属しています。その活動は全九州医師テニス大会、全日本医師テニス大会、世界医師テニス大会参加の他、関門・小倉医師テニス、対山口市医師会テニス戦、月例会、一泊テニス旅行など、テニスの腕を磨きながら親睦を暖めています。なかでも全九州医師テニス大会には毎回10数名が参加している程ですから活躍振りはお判り戴けるものと思います。

昭和41年10月、第一回全九州医師テニス大会に今は亡き時政希典先生とペアを組み準決勝で敗退して以来、目標は優勝カップをと参加を続けてきました。その間、時政先生、吉田先生、福井先生、内田先生、相良先生、秋武先生、横光先生、三谷先生とパートナーをお願いし、門司の先生が都合がつかないときには小倉の先生にも２回程お願いしました。参加する門司の先生方と前夜祭を盛大

表彰状

北九州市門司区
中島教隆殿

あなたは昭和四十一年春の本協会主催の第一回全九州医師テニストーナメントに出場されて以来春秋年二回のテニス大会に満二十五年にわたり連続出場されました
今回大分市において第五十回全九州医師テニス大会を開催するにあたりあなたの連続五十回出場の偉業をたたえ記念品を贈呈し表彰致します

平成二年十一月二十四日
九州医師テニス協会
会長　中島定次

に行ったりして、参加することに意義があるというオリンピック精神に則り春秋二回の九州ドクターズに参加を続けて25年、今回連続50回出場と成りました。大分の第50回大会では門司から２組の優勝チームが出たこともあり、門司組12名はふぐ料理で気勢をあげ帰りの汽車では高いびきでした。

25年の間には全て健康というわけでなく体の故障もありました。寝ちがいで首が動かなかったり、膝を痛め階段をまともに上下出来なかったり、四十肩五十肩で腕が挙がらなかったり、かぜを引いて解熱剤のお世話になったり、寝不足で眼がちらついたりなど、それでも休場することなく参加し続けられたのは、ひとえに門司の仲間の先生方のお陰です。良き仲間に恵まれてこれからもテニスに励みたいものです。

大分はテニスに適した良い所です

第50回大会出場記

内田　良蔵〈北九州市・門司〉

9時頃ベッドに入ったが暑くて寝られない、11月の末だというのに。温泉の湧くホテルだから暑いのも当然かなと思って窓を開けて寝る。6時半に目が醒めた。「此れは寝過ぎた」慌てて身支度をして朝食に下りると食堂には既に門司よりの遠征組が顔を揃えている。昨日の前夜祭はたいへんな御馳走で消化剤を要するくらいだったが、朝のメニューもかなり良い方である。大分は意外に暑く、また意外に食事の良い所である。

タクシーに乗って会場に向う。テニスコートに一番近い所で降りたにもかかわらず、行けども行けども受け付けがない。とうとうテニスコートがなくなってしまった。道のりの半分位まで戻ると受け付けがあった。何のことはない、通り過ぎてしまっていたのである。3倍位歩いたことになる。それでもまだテニスコートはがら空きだったので、ラリーから初めて、ボレー、スマッシュ、サーブの練習。福井先生のサーブがネットばかり、「入らん、入らん」とこぼす。トスが低いようなので、「もう30cm位上げたら」というと、とたんに弾丸サーブが入るようになった。サーブまで練習して良かった。まだ時間があるので、サイドを変えてはじめからやり直し、40分位練習してへとへとになってしまった。

ところが試合にはなかなか入れず、天本・鶴組対大野・馬渡組の試合を観戦する。天本組好調で6－1で勝つ。ことに鶴先生は横綱相撲で相手の空きを余裕を持って突いて、「此れは仲々手強いぞ」と思わずホーデンの縮み上るのを感ずる。やっと園本・松田組と対戦することになった。自分のサービスを永い永いジュースの末やっとキープしたら、次は園本先生のサーブ、簡単にやられ1－1、ところが福井先生のサーブの番、弾丸サーブでレシーブがほとんどミス、ぱたぱたと片付けて此方は2－1でほっと一息だが、相手のショックは大きかったと見えて3－1とリード、3－2とされたが4－2とリード、4－3にされかかったが福井先生のサーブに助けられ5－2、6－2と押し切った。園本先生のひねくれた球のスライス

福井先生（左）の弾丸サーブに助けられました

でバックを突かれ、一度はやられた福井先生、二度目からはその球を相手のバックに決めて、相手の得意のパターンを封じたのが勝因。

第二試合、強そうな天本・鶴組、鶴先生のフォアと天本先生のボレーに手こずったが、何とか1－1、そのあとの福井先生、またまた弾丸サーブ、早い重い球がコートに決まり、レシーブがほとんどネット、また相手にショックを与え、あれあれという間に6－1、ほとんど相手のネットによるポイント、まさかこんなスコアになるとは。逆になってもおかしくなかったのに。

次は大野・馬渡先生、けいれんさえ起さなければという消極的な気持ちで臨んだのが、つまずきのもと、へなへな球を次々決められ、あっという間に0－2とリードされる。ところが、またまた福井先生の弾丸サーブ、剛速球にレシーブミスが相次ぎラブゲームで取り、そのショックで次も取り2－2、あとは此方の調子が出て6－2と勝ち、とうとう3戦土つかずで優勝。みんな福井先生のおかげです。福井先生、猛練習して岡山の全日本ダブルスに池田先生と優勝しただけあって実力は抜群でした。こちらはおんぶにだっこ。トロフィーを戴いて芝生で高壮年優勝の秋武・江島組と並んで北九州組の真ん中で記念撮影、永いテニス生活でこんな瞬間に会えるとは、本当にラッキーの一語につきる。今年はおそくまで暑くて良い年でした。また大分はテニスに適した、ほんとに良い所です。

余談：試合が終わり、一風呂浴びようとみんなで郊外の豪華大衆浴場に行った。おふろは広くて気持ちが良かった。汗を流したあと、頭を流すと隣で既に洗い終った久米先生が、シャンプーとリ

ンスはここにありますよと言う。シャンプーとリンスの容器が区別しにくいのはいかんなーと思いながら2度シャンプー、もう一回洗ってからリンスと思っていたところ、中島先生が持ち去ってしまった。色の白いのを目当てに「まだ終っていない、もう一回洗ってから」と言うと、相手は憤然として「何言うか、此れは俺のシャンプーだ」と言ってビニールの袋に入れて口をゴムでくくってしまった。良く見ると中島先生ではなくて、赤の他人である。似ているのは色の白い所だけで、ややぽっちゃりした若い人（40台位）である。かりにAさんとする。驚いた。あやまって頭をすすぎドライヤーで乾かそうとするがスイッチが入らない。カチャカチャやっていると、さっきのAさんが、「10円入れんと動かんよ」と教えて呉れた。親切な人である。充分乾かしたのにまだ動いているので、一旦止めて、小松先生に「これまだ動くよ」と言ったら、小松先生スイッチを入れようとするが入らない。一旦切ったら10円入れんと動かん仕組になっている。それにしても大分の人は同級生で机を並べていた江藤君と同様、口はぶっきら棒だが、色が白くてポッチャリしていて親切だなと思った。

「継続は力なり」を信じて

55歳からのテニス

小松　才治
〈北九州市・門司〉

北九州市営門司テニスコートを見おろせる高台に移転して約6年になります。朝早くから早朝会のメンバーが一生懸命練習しているのを窓越しに眺めて、やっているなあ、テニスとはそんなに面白いものかなあ？と言うような感じでした。

一方、家内は10数年前から良きインストラクターを得、沢山の友人と共に婦人教室やナイター教室で練習しています。その練習ぶりを垣間みるに、お世辞にも上手とは言えませんが、年甲斐もなく楽しくプレイしているので、それでは私も55歳からの手習いと考え、家内の古いラケットを借りて、いざ練習と張り切ってはみたものの、教えてくれる人がいない。家内から習うと将来私の方が上手になった時に何を言われるかわからない。

仕方なく見様見真似で壁打ちから始めました。しかし物言わぬ壁の前に立ち壁だけが答えてくれる単調な練習もすぐ飽きて、途中で煙草をプカプカさせて早朝会のメンバーの試合を見る仕末で、これではみんなが相手にしてくれないと考え厚かましくも家内とコートでラリーを始めました。球拾いの時間の方が多い練習でしたが、幸せなことに3年前より良きインストラクターの下、ナイター教室で特訓を受けています。

その成果は残念ながら九州医師医学会で証明済みで、永遠のダークホースとなりそうです。

テニス歴は短いのですが少し感想をのべさせていただきます。先ずテニスはすべてのスポーツでも同じかも知れませんが、右肩上りの線を描くように上手にはなれないことが思い知らされました。そしてポイントの積み重ねのゲームでもあります。当りそこねのフレームショットでも結果オーライ、ナイスボレー、強烈スマッシュ、猛烈サーブでエースを決めても何れもワンポイントです。

野球のように9回2死満塁で逆転ホームランのようなドラマはありません。それだけワンポイントが大切な意味を持つわけで、やたら強打して早く決めようと考えるのは間違いのようです。

しかし私はオール・オア・ナッシングではないのですが、チャンスがあれば力一杯強打してしまうのです。失敗の方が多いのですが、消極的に攻めて失敗するよりも学ぶべきことがあると思っています。チャンスは貯蓄が出来ないので失敗を恐れずに攻めていきたいと考えます。

テニスはスポーツの中でも、瞬発力、持久力、判断力が要りますが、短時間で楽しめますし、ストレスも解消でき、協調性も身につくようです。「継続は力なり」と言う言葉を信じて、まだまだ頑張ります。

我流テニスを楽天的に楽しんでいます

久米　只彦
〈北九州市・門司〉

ゴルフのコンペでも万年敢闘賞の私をみかねて、実力派にして学究的なN先生曰く「練習、練習もよいけれど、少しはゴルフの本でも読んで理論と技術をマッチさせなければスコアはまとまりませんよ」と、よきアドバイスをして下さいました。同じ様に時政先生からも「我流のテニスでは決して上達しませんよ、それでは面白くないでしょう」とよく注意されたものです。五十の手習いでもテニス教室で基本的なことをマスターして下さいとのお言葉が今でも耳に残っています。しかし、生来運動神経は鈍い方だし、また本業の方が忙しいと自分なりの屁理屈をつけて、健康のためとマイペースで谷町市営コートの早朝テニスに参加させてもらって早や10年をすぎてしまいました。

よき先輩、吉竹先生からもご指導、練習をつけていただいて初めてＫＤＴＡの試合に出たのが長崎市での九州医学会の時でした。それ以来、機会ある毎に、パートナーとなっていただいて出場したものの、いざ本戦となると練習時とは異り、異常に硬くなってしまいます。周りの先生方に激励されるものの実力の２～３割も出し得ません。

健康第一と我が道を往って壮年Ｂ組で試合してボヤボヤしているうち、いつのまにかこの第50回大会から超壮年Ｂ組に昇級？せざるをえなくなってさすがに寂寥の感を覚えました。頑張らなくてはパートナーの小松先生に申訳ないと思っている矢先、偶然、本屋で「コントロール、パワーアップ開眼のヒント集」「先手をとるダブルス２人の役割」更に福井烈さんの「テニスを始める人のために」の３冊をみつけて泥縄式よろしく、これこれと一気に読み上げました。読んでいるうちは気分爽快、頭の中もよく整理できたぞと少しは自信がついたと安心したのも束の間、大分市での25周年大会の成績もサッパリでした。折角のリーグ戦でありながら１勝３敗という散々な結果でした。相手のペアは女性か、ミックスと甘く考えたのも大誤算でした。年若く、練習でよく鍛えあげたご婦人方の雄姿と軽やかなフットワークにふりまわされてますます硬くなり、なすすべも忘れて、いつもの如く苦汁を味わいました。アッという間に試合を終えてコートから引揚げる時になって日頃の練習と精進をパートナーと誓い合うものの打上げのビールのうまさには、全ての憂さを忘れてしまいます。

門司での最長老小林先生は、87歳という高齢にも拘わらず元気にコートにたたれ、私達と対等に腕をふるわれます。そのお姿をみるにつけ、私達後輩はまだまだ保てるぞと奮起して毎朝ねむい目をこすりこすりコートへでかけていく此の頃です。50周年大会までには少しはものになるだろうと至極楽天的に我流テニスを楽しんでおります。

たかがテニス、されどテニス

大塚　節雄　〈北九州市・門司〉

50歳を過ぎてはじめたテニスの故か、素質の故か、いや練習量の問題か。何れにしても予期していたこととはいえ一向に上達しない。

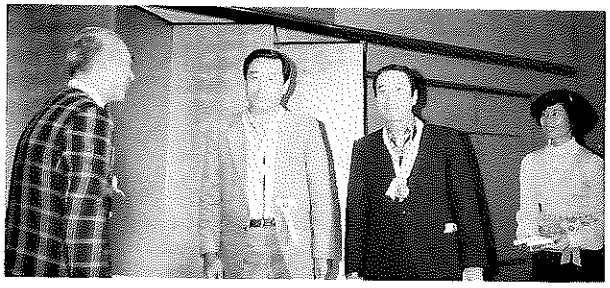
せめて、気のむいた時、ふらりとコートに出かけ、知らないチームにでも“仲間にいれて下さい”を気軽にいえて、迷惑をかけない程度にとの願望と目標を置いてはじめたテニスだが、なかなか……。従って全九州テニス大会は２度程度出場したが、当然ながら結果は散々たるもの、パートナーに唯々迷惑をかけた記憶のみ。

年に関係なく（そろそろ還暦）、練習はせず、そのうえ素質もなけれども、或る日突然彗星の如く現われて、全九州大会にその名をとどめる方法、ありませんでしょうか。

所詮、夢と思いつつ当分夢を見続けます。

そのうち出場者名に私の名前を見つけた折りは、呉々もお手やわらかにお願いします。

第32回大会、相良先生（右）と組んで壮年B組優勝



優勝受負人、秋武先生と組めば―第23回全日本大会壮年A組で金メダル

ビバ!!沖縄

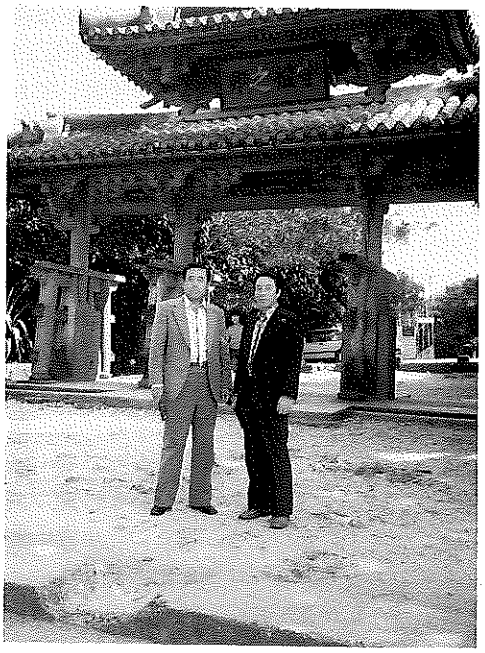
横光　洋
〈北九州市・門司〉

日本最南端に位置する沖縄県。太平洋戦争で地上戦を経験した唯一の県。ＪＲが走っていない唯一の県…等々。殊に戦争に関していえば、第二次世界大戦で戦場となった沖縄には全土に鉄の暴風がふきまくり、緑ゆたかな山野は一変し、日本兵６万６千人、民間人17万８千人。米軍戦死者１万２千人を加えると沖縄戦での死者は25万人を越えると言われる。この様な惨事を二度と繰り返してはならないのは当然だが、本日は主題がテニスなので戦争の話は措かせていただこう。

旅行好きの私は前後５回沖縄を訪れている。最初に訪れたのは沖縄が本土復帰（昭和47年５月）して間もない昭和48年正月14、15日で、この時はパスポート類似の書類が必要であり、また通貨は米ドルであった。ゴルフ仲間８名のツアーであったが、到着日の午後、南部戦跡巡り、翌日は沖縄国際ＣＣでゴルフを楽しんだ。夜の宴会が「左馬」という一流料亭の舞台付きの素晴らしい部屋で開かれ、優雅な中にも気品あふれる琉球舞踊を鑑賞しながら本格的沖縄料理に舌鼓をうった事が忘れられない。

２回目は昭和50年８月の盆休みを利用して沖縄海洋博見学を主目的に家族連れで沖縄旅行を楽しみました。此の時、小学４年生だった長女は既に嫁ぎ、一年下の弟も今春医師となり九大耳鼻科で研修中です。正しく光陰矢の如し。

３回目がテニス。昭和56年11月29日開催の第32回全九州医師庭球大会出場の為である。同じ門司医師会の相良先生と組んで壮年Ｂ組に出場し念願の優勝を果した。というのは過去いろいろな大会に出ても実力不足の為、１、２回戦、運よく決勝まで行っても常に花嫁の付添いという事で、是非一度公式戦で優勝したいと熱望していた訳ですから、この優勝の嬉しかった事（相良先生も初優勝）。



沖縄のシンボル、守礼の門をバックに

沖縄美女にかこまれて、ごきげん

感激!!　沖縄大好き！

しかしながら良い事ばかりは続きません。この優勝のお陰でＡ組に昇格という名誉は与えられたものの、その後数年は常に１、２回戦敗退という辛酸を味わせられる事になりました。後日談ですが、名手、秋武先生と組んでもらって第38回熊本大会で壮年Ａ組優勝が出来、やっと両眼があいた

次第。

さて４回目が新々会（門司区東新町、西新町の開業医６名の親睦会）での観光とグルメの旅。

５回目がまたテニス。昭和60年11月３、４日に行われた第23回全日本医師庭球大会（連盟主催）に優勝請負人、秋武先生と組んで出場。３日に行われた硬式の部は壮年Ａ組に出場、組合せに恵まれて楽々優勝。翌日行われた軟式の部にも腕試しの心算で壮年Ｂ組に出場したところ、負けそうで仲々負けず到々全勝で優勝してしまった。２日間で金メダル２個貰って夢見心地。益々沖縄大好き。ステーキハウスで心ゆくまで祝杯をあげました。

テニスに関して正直に言えば、沖縄での大会は本土での大会に較べて参加者が少なく、従って優勝の確率が高くなる訳だが、テニスを除いても紺碧の海、豊かな自然、観光資源の多さ、沖縄古来の芸能、沖縄独得の料理等々、本当に魅力あふれる島です。皆さん沢山沖縄に集いましょう。

次回沖縄での全九州大会の開催は多分６、７年先の事だと考えられますが、その時は多数の先生方の参加があり沖縄大会で優勝するのは仲々難しいと言われる様な盛会である事を祈っています。

雲仙、霧中のテニス

一安　弘文
成田　征四郎
〈北九州市・門司〉

ロッジ風のホテルの前で

水溜りのコートで“モップ掛け”

門司区医師会テニス部では年一回、一泊の遠征を行っている。今年は７月14日（土）、15日（日）の両日、総勢15名で、涼しい所でテニスをと雲仙旅行を実施した。ホテルはロッジ風のしゃれた造りで、落着いた気分にひたれた。この旅行の名物の一つにざこ寝がある。枕を抱えてどうにか好位置を確保し、耳栓にて完全防音する。それでもすさまじい岡崎、桜井両先生の兄弟イビキにやられてしまった。夜半からの激しい雨で、翌日予約していた土のコートが水浸しとなり、がっくりと肩を落してホテルに帰って来た。急遽、長崎市内観光へ変更しようという話が持ち上がる。

待ってましたとばかり切り替えの早い横光先生続いて小松夫妻、秋武（邦）、大塚先生が「しっぽく料理で一杯」と、いそいそと身仕度を始めた。

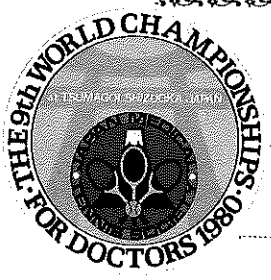
ところがである。ホテル側が気を利かして国民宿舎所属のハードコートを頼み込んでくれたのだ。それまで完全に消沈していた福井（恭）、中山先生、それに久米、中島、秋武、三谷とそうそうたる猛者達が「イエーッ」といっせいに立ち上がった。皆してモップ掛けよろしく、水溜りのテニスコートを丹念に拭いて回ることになる。

いよいよプレー開始である。奥深い山中での雨上がり、視界数10ｍの霧の中、相手の姿がぼーっとかすむのも二日酔いのせいばかりではなさそうである。熱戦約５時間余り、無事終了。霧中テニスは、門司テニス部の歴史上初めてらしい。

経験してみれは真夏の暑い炎天下よりははるかに快適なテニスであった。全員無事故で遠征テニスを終えることが出来た。しかし、みんなの夢は、とてつもなくでっかい。この分では外国遠征に挑戦する日もそう遠くはないだろうと思われる。

“私をやっつける人は鬼です”

身体障害者手帳の交付を受けて



昭和55年、日本で初めて開催された世界大会のワッペン

秋武　強
〈北九州市・門司〉

昭和50年の世界大会「妻恋」で小林、池田、津田の各先生

門司区には、早朝テニス会という会があって、朝の６時には４面のコートが一杯になります。参加者は医師会員が多く、私達夫婦はその常連で、この20年来というもの、鳥が鳴かない日があっても秋武夫妻がテニスコートに来ない日はないと言われておりました。

それが最近では、休み勝ちになり、小松先生ご夫妻にとって代わられました。それは、もちろん小松先生ご夫妻の熱心さによることが第１ですが、一つには私の心臓の病気が原因でもあります。

それは昭和60年頃から次第に忍び寄ってきているようでした。特に、朝早く試合前の練習を始めて、ラリーの最中に、何だか胸に石でも詰まってくるような変な感じです。それでも、そのまま構わずテニスをやっていると、いつの間にか治まってしまいますので、気にも留めないでいました。

門司医師会では、会員にサービスとして、毎年２回、健康診断を行っています。私はこれを必ず毎回受診しています。しかし何も引っかかったことはありません。血圧は120／60くらいで正常ですし、コレステロールも低値。ＥＣＧその他も異常無し。

煙草は吸ったことはありません。アルコールは生来弱い方で、ビールでは小コップ１杯程度が限度。すぐ顔に出ます。ところが最近は付き合いが多くて、大瓶１本程度はいけるようになっていました。それが酒、ビールを飲み過ぎた夜にも症状が出るようになってきました。ただしＥＣＧには負荷をかけても変化が出ません。まさかと思いましたが、念の為に亜硝酸アミルを持ち歩くことにしました。

昭和62年、山口医師会との年１回の対抗戦で、山口市の野瀬先生経営のオーサンステニスクラブで、やはり試合前のラリーの最中に症状が出たので、この亜硝酸アミルを吸ってみました。ところが何と、麻薬を使ったときはこんな気持ちではないかと思うようないい気持ち、胸がすーっと大きく広がるではありませんか。びっくりしました。この時にこれは狭心症だなと確信しました。

昭和63年、春の全九州久留米大会では、小倉の東先生とペアーで出場。決勝戦で、熊本の緒方・中村組と対戦。東先生の頭上を越す相手のロブをどうしても追い付くことが出来ない。これまではこんな事はなかったのにと思ってもどうしようもない。一旦は４－５と絶体絶命に追い込まれました。それでも何とか薄氷を踏む思いで、６－５でやっと勝つことは出来ましたが、おかしいなと思いました。

それから後は症状がどんどん進行します。急ぎ足で歩いても出るようになりました。一旦、症状が出ると、しばらく休まないと治まらなくなってきました。労作性狭心症なのです。ただ相変わらずＥＣＧには負荷を掛けても変化が出ません。ホルター24時間ＥＣＧをやってみました。早朝テニスで症状が出ているのに、ＥＣＧには変化がありません。ここで狭心症の診断に対して半信半疑となりました。ただ２階段負荷では出なくても、トレッドミルなら出るということがありますというので、63年７月、小倉記念病院を受診しました。

トレッドミルによるＥＣＧ検査を受けましたが、相変わらず異常無し。それでも詳しい検査をしようということで、即日入院し、心カテによる冠動脈造影を受けました。その結果、な、な、なんと、

3枝に異常有り。まず、対角枝は完全閉塞し、この末梢側には50%狭窄している右冠動脈からバイパスが来ているので心筋梗塞にはなっていない。これはテニスをやってといたお蔭だろう。完全閉塞すれば致死的な前下降枝は糸筋ほどしか通っていない、99%狭窄で、もう少し遅れれば危ないところだったというものでした。

それにしてもＥＣＧとは一体何なのだ。これまでＥＣＧ検査に対して抱いていた絶対の信頼を根底から覆されるものでした。結局のところ、狭心症の診断は、ＥＣＧに所見が出ていれば別ですが、所見が出てなくても否定は出来ないということなのです。患者の訴えに対する亜硝酸剤による治療的診断に勝るものはないということを身をもって思い知らされました。

早速ＰＴＣＡ、いわゆる風船療法をやって頂きましたし、その後ＰＴＣＡは2回、心カテは現在まで都合8回実施しました。その結果、完全閉塞していた対角枝は開通して50%狭窄までになりました。99%狭窄の前下降枝も50%狭窄にまで広がりました。平成2年4月の心カテを最後に今のところ平成4年4月まで執行猶予中です。ただし薬は7種類、1日5回、腹一杯になるほど服用しております。

症状は今のところ、大体治まっているようです。それでも駅の階段などを登ったり、無理をすると悪いようです。アルコールについては主治医は許可してくれていますが、ビールは昔に戻って、小コップ1杯が限度となりました。2杯目になると酔っぱらうだけでなく、狭心症が出ます。日本酒、ワインなどの醸造酒が特に悪いようです。ウイスキー、ブランディなど蒸留酒では、もう少し行けるような気がします。醸造の際の粕が悪いのかなと思っています。

身体障害者手帳を貰って、税金がほんの少し安くなりました。ＪＲ、飛行機、バスなどの割引も有ります。

試合の際に私と当たったら、私が身体障害者であることをくれぐれもお忘れなく、手加減をお願いいたします。私を無理に走らせたり、やっつけたりしたら、人道にもとる鬼のような人間であるということになります。よろしくお願いいたします。

妻恋の世界大会で
秋武夫妻

未（ひつじ）年のテニス
グッドルーザーへの道

秋武　邦子
〈北九州市・門司〉

§タマ事始め：長年別居中の夫の“タマ出し”で、更年期障害の予防のために、はじめてラケットを握りました。今を去ること20年前です。

§ＫＤＴＡ初舞台：「雨のコートに雑巾掛け」のタイトルで、“この時ほど、テニスを愛好する者みんなが一体になる連帯感や友情のようなものを感じたことはなかった”と小倉の竹末庸夫先生が15周年記念誌で述べられた、思い出の46年6月大牟田大会が私の初舞台なのです。パートナーは秋武強でした。

§優勝：デビュー2年後、第15回宮崎大会にて、まことに信じがたいことながら、秋武・秋武組はＢ組優勝。勝利の美酒に酔いしれました。

全日本では、小林先生と寿組で金メダルと武見杯（青銅レリーフ）を、女医組で金数回、銀、銅などいただく中に、口では“わたし運痴だから”と言いながら、心の中ではひょっとしてテニスの天才かしらと思ったりしました。

老若男女のチェンジングパートナーの中にプラトニックラブを秘めたり、「上医の薬箱にはまりを入れ」などとうそぶいて、テニスの効用について述べたり、いっぱしのプレーヤーになったように錯覚して、テニス、テニスに明け暮れでした。

54年スイス（フリムス）、55年日本（掛川）、

56年ドイツ（ガルミッシュ）と世界大会にも参加して、有馬、井島、中島父子、進藤、松瀬、当山ご兄弟、板家、松下、深水良ご夫妻、津田、小林、吉田、池田、福井、内田、小山の諸先生方と思い出のアルバムを綴らせていただきました。

§天国のパートナー：今は亡き時政先生は、そのお立場上と、生来のジェントルマンシップから“グッドルーザー”たるべく、私をパートナーに選んで下さいました。あのすばらしいスライスのバックストロークとボレーのお蔭で、59年11月の熊本大会では宮城・森岡組を制して、超壮年３位のカップを手にさせていただきました。試合の後には必ずラヴレターつきのすてきなプレゼントが届けられました。

やさしかった時政先生も今は天国に―59年の全九州大会で、左は森岡・宮城組

一昨年12月、門司ローンテニスクラブの会長挨拶は、いつもの通りの、あたたかくしゃれたものでした。ところが、ふとした風邪が元で、間質性肺炎に倒れられ、思いもかけず、翌年の早春、そのままかえらぬ方となってしまわれました。旧五高、旧帝大、海軍軍医士官と日本のよき時代のよきものを沢山身につけられた巨星はいま天にあります。

ある春の朝、門司コートに津田先生に伴われて、スマートな長身をあらわされたのは、当時九大学長の武谷健二先生でした。幼い頃から秀才のほまれ高い「武谷のケンちゃん」です。尻ごみする私をパートナーに、一勝して、さわやかな笑顔を残して去られました。病床にお届けした甲宗八幡様と和布刈神社のお札の願いもむなしく今は天におられます。

§昔の光今いずこ：50台の大台に乗った頃から、末梢関節に始まる手指の変形。そうです、整形の講義で聞いたヘバーデン結節に我が指が冒され始めました。それまでに経験した数々のアクシデント……ボール命中による球結膜出血、膝関節マウス、テニス肘などとはわけがちがいます。グリップが駄目になってしまったのです。最近では串団子の屈辱にも耐えねばならなくなりました。

§テニス教室再入学：目を見張る急速の進歩をとげられた成田夫妻、岡崎、一安の若い先生方。もう今なら追い付くはずはあるまいと上達の秘密を打ち明けて下さいました。　Ｓコーチにつくことです。　そこはオバタリアンの図々しさで、無理矢理その教室に入れて頂きましたが、現在私は独り“オチコボレ”ています。コーチは口をすっぱくして、グリップをうすくと矯正をさせられます。私は曲がった指を手袋の中におしかくして、厚くしか握れないわけは申しません。見放され、退学させられる恐れがあるからです。それでなくてもコーチは私がラケットを振る度に、首をかしげて、がくっとズッコケます。ステップを踏めば“ダンスではありません、もっと素早く”とオコられます。コーチの言う通りに出来なくて、罰ゲームでたちまち終わりの時が来ます。

§未のテニス：未のこの年、暦が還りました。“未”は未来の未です。
これからのテニス人生は？

そもそもテニスが国際的且つロイヤルスポーツであるとしたら、果して優勝などしてもよいものなのでしょうか？　ネットの向こうの方をよろこばせることこそ真の名プレーヤーなのではないでしょうか。それも充分に楽しませて、（５－６）とか（７－８）とか。

もう１つ、男女均等法の世の中でも、男性は絶対に女性より強くあってほしいのです。昭和１桁生まれの大和撫子としては、殿方を負かすわけにはいかないのです。

私の未来は輝いています。　グッドルーザーへの道です。

Ａ、Ｂの区別のない超壮年になった暁には、再び最初のパートナーと再婚して、この思いを果たしたく願っています。彼も身障者となりましたけれど……。

せめてこれ以上指が曲がりませんよう、足腰が弱りませんよう、ボケがすすみませんよう　　ＫＤＴＡの神々よ、お護り下さい。

連敗もまた楽し

岡崎　薫　〈北九州市・門司〉

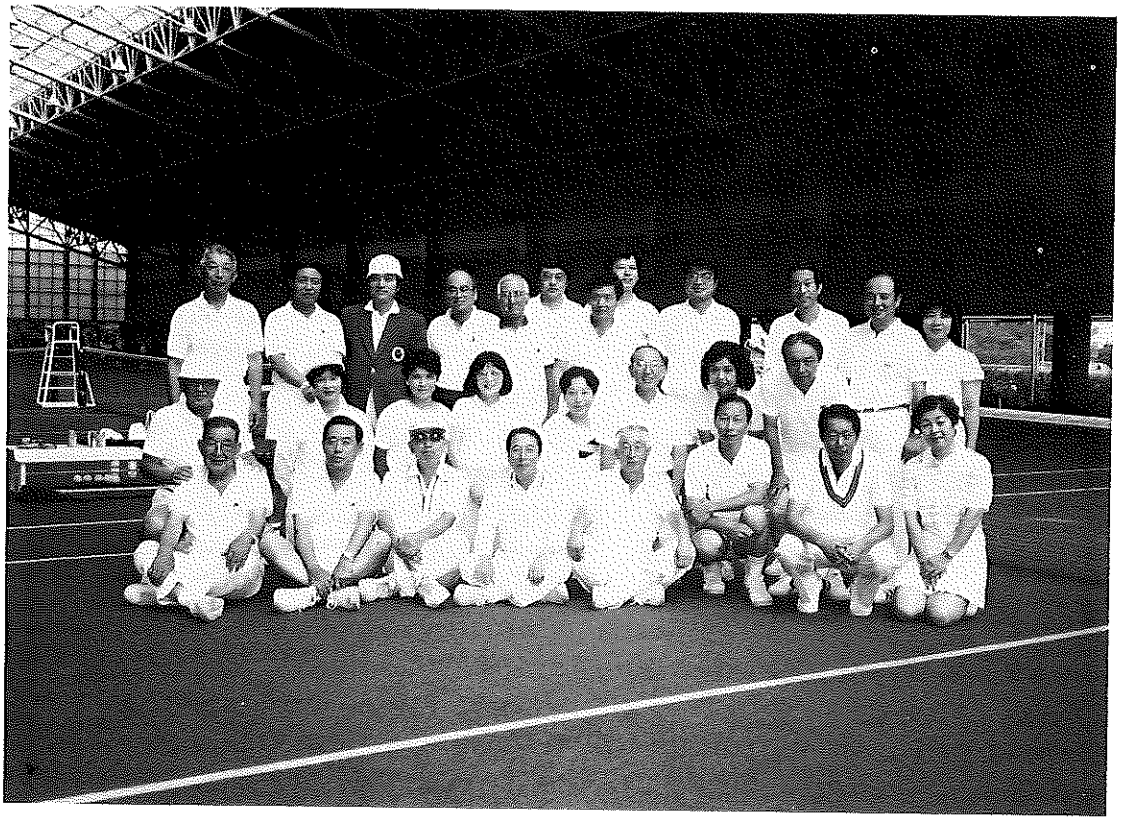
開業して、しばらくすると下腹部が見る見る膨隆し、体重はアッという間に70キロを超えてしまった。何とかしなければと思っていた時、先輩の先生方に勧められたこともあり、テニスを始めてみようと思い立った。幸い、近くの市営コートで木曜の夜にナイター教室があるとの事で申し込んだ。学生時代、医局時代に野球をやっていたのでテニスぐらいと多少軽く考えていたが思った以上に運動量が多いのと難しいのにびっくりした。教室で初めてラケットの握り方から教わった。20歳代から、60歳代まで、様々な年齢と職業の人達と一緒になって汗を流すのは爽快であった。

教室では基本から教わるので、それなりに少しずつ球が打てるようになりつつあったが、もとより運動神経と頭があまり良くない私の上達は遅々たるものであった。そこへ全九州医師テニスで御主人と組んで優勝された秋武邦子先生からパートナーとして全九州へ出るようにとのお声がかかりゲームばかりやるようになった。ミスをしてはパートナーに悪いと思い、基礎もしっかりしていないのに姑息なテニスが自然に身についていったように思う。こんな状態なので、全九州優勝経験者をパートナーの力で１回戦敗者としてしまった。

この敗戦を嚆矢として、以後パートナーを替えながら一般Ｂ、壮年Ｂ全九州、全日本医師大会に出場し18連敗を経験しました。全九州は春と秋年２回、本戦、コンソレ、リコンソレと１回の大会で１～３連敗、年に３～５連敗、足かけ５～６年負け続けてしまった。この間、秋武邦子、妹尾、桜井、柳井、横光の諸先生に御迷惑を掛けながら旧オリンピック精神の権化の如く、諸先輩に慰められながら連敗を重ねました。しかし、負けながらもその度に、対戦相手から少しずつ学び、やっと連敗を脱出することができました。その後、中山、鳥巣、大塚、河田、久米先生とパートナーになって頂き、少しずつ勝てるようになりましたが、今一つ壁を破れません。姑息なテニスに終始している事に気付き、初心に帰ってやり直そうと教室に入りましたが、身についた錆は取れず、その上、年と共にひどくなる体力と反射機能、柔軟性の低下を痛感しながら、それでも少しは変わるかなと、はかない望みを抱きながら、通っています。教室では根気の良いコーチに溜息をつかせながらも時々これだなと何かを掴んだ様な気がする時があるのですが、翌週になると元の木阿弥、実戦においては勿論進歩なし。でも、いつかはと、連敗中の時を教訓に、体力の衰えと競いつつ蟷螂の斧とは判っていても壁に挑んでいる昨今です。

しかし、平成元年の春は小倉の前田先生という強力なパートナーのお蔭で決勝トーナメントへ進出し、準決勝で産医大の中田教授、角田先生組にまぐれ勝ち、勢いに乗って、決勝は予選リーグで完敗した末次先生御夫妻に６－５とねばり勝って念願の壮年Ｂ初優勝を果しました。将に私にとっては奇蹟の優勝としか言いようがありません。幸運と、一にも二にもパートナーのお蔭であり、今後はＢ組優勝者の名に恥じない力を備えるべく更に励まねばと心を新にしています。

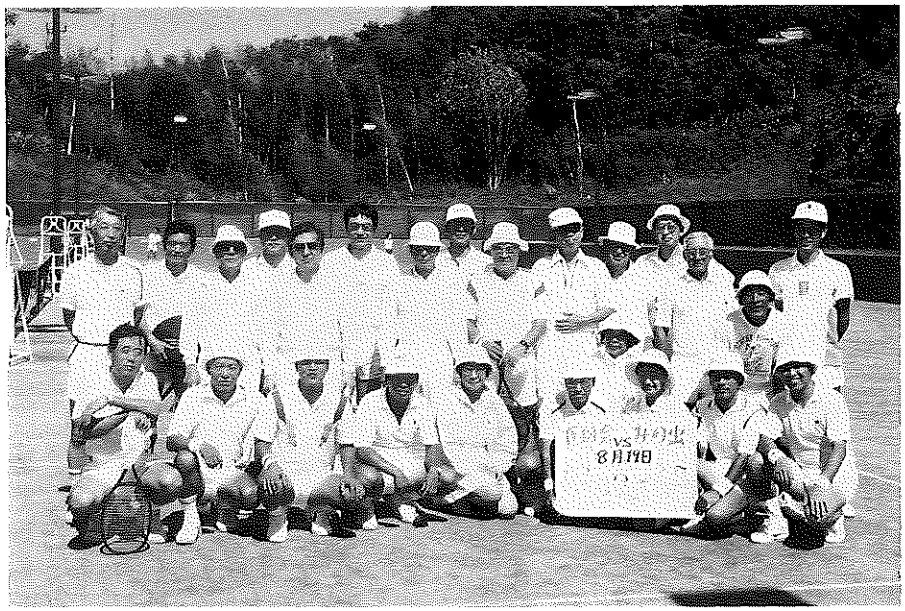
今からまたＡ組で連敗記録を重ねるでしょう。しかし、いつかはＡ組で１勝をと、果せぬであろう夢を抱きつつ、負けると判っていても、参加する人が少なければ大会が盛り上らない、枯木も山の賑わいだし、他人を喜ばせる事にも意義があると勝手な理由をつけて参加する事にしています。しかし本当は参加する事により、目標を持って努力する事が結局向上へとつながると信じつつ連敗も楽しと達観する事にしています。しかし、敗けると判っている者をパートナーとして選んでくれる心優しき方を捜さねばならない。こういう立場では声を掛けられるのを待つだけで自分からはお願いしますと言えないものである。神よ！心寛きパートナーと１勝をお恵み下さい。連敗もまた楽しである。

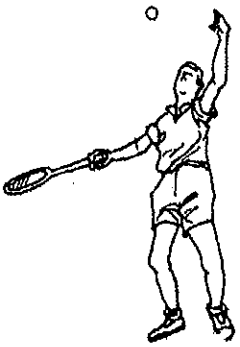


▲平成２年７月８日、門司区医師会と山口市医師会の対抗戦（北九州市八幡西区のプリンスホテルインドアコート）

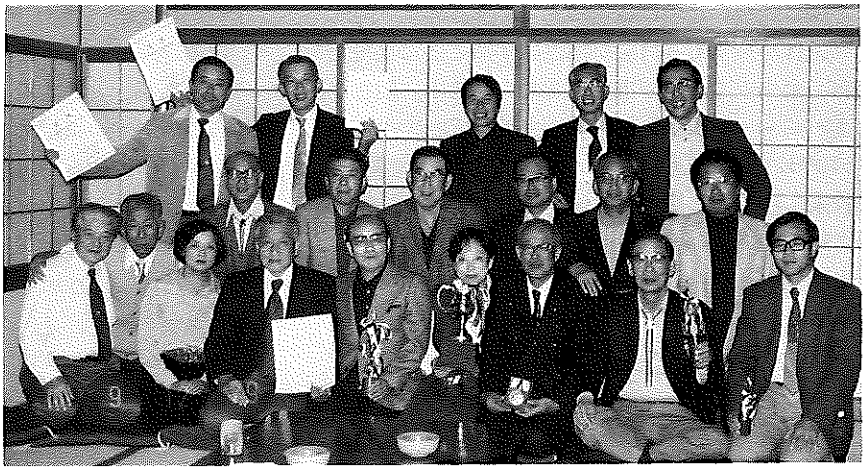
張り切ってます、門司の連中

▲平成２年11月25日、全九州大分大会で、小倉の江島先生と一緒に門司区のメンバー



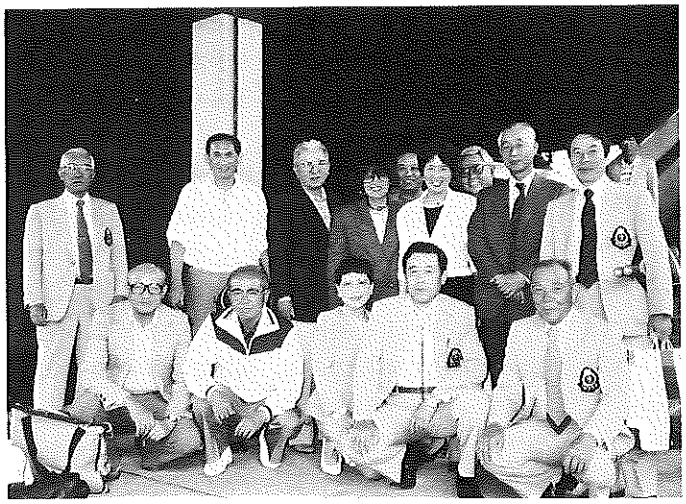


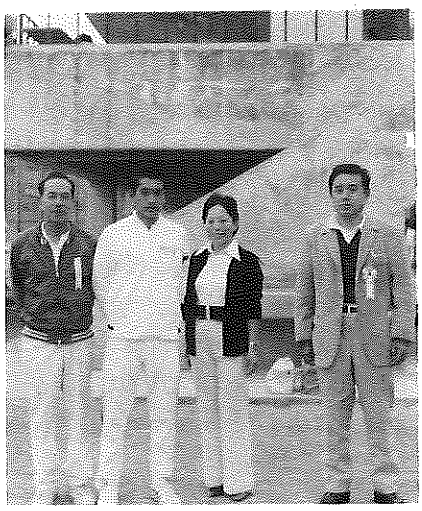
▲医師会ＶＳみの虫会（門司区のテニス愛好グループ）＝平成２年８月19日、山口県滝部で



昭和54年の納会、会員の全日本優勝などを祝す、故人となられた時政、池田先生の顔も見える▶

全九州徳山大会（昭和62年５月10日）ＪＲ徳山駅で北九州・熊本・久留米勢がそろって▼





▲門司が生んだベストプレーヤー、福井烈プロの高校時代（昭和51年１月２日）九州沖縄大会で、当山堅三氏と秋武夫妻

早朝テニスで足腰鍛え

加来　数寿
〈北九州市・小倉〉

全九州医師テニス大会も本年大分大会をもって50回となったが、誠におめでたい次第である。

この期に小倉医師会テニスクラブ及び自身の現況をふりかえってみたい。

小倉医師会テニスクラブは故粕谷先生の御提唱で昭和34年に創部され、以来脈々と続いている。

竹末先生が２代目会長を務められ、板家先生と共に輝かしい戦績を上げられ、文字通り牽引車をつとめられた。竹末先生が御病気で退かれたあと活力に満ちた尾崎先生が引き継がれたが、思わぬ奇禍に会われたのは誠に残念である。本年８月より、はからずも不肖私が御世話することになったが、全くの力不足で忸怩たるものがある。現在マネージャーの田畑先生が熱心に御世話されている。

クラブ員は板家、江島、大庭、尾崎、奥、河田、竹末、長、月守、中村、狭間、浜口、橋本、東、吉岡、田畑、小串、佐長、前田、梶原、佐本、岩本、勝本、野村、橋口、平方、友尾の諸先生と小生の28名であり、外に医師会外の３人が加わっている。主な練習は三萩野市営コートにおける所謂モーニングテニスであるが、その他それぞれ最寄りのクラブで練習にはげみ、一騎当千の強者ぞろいで、心強いかぎりである。全九州にも度々出場して成績をあげている。第49回福岡大会では江島先生が久留米の中川先生と組んで高壮年で優勝、河田先生は福岡の池田先生と組んで３位であった。第50回大分大会では江島先生は門司の秋武先生と組んで高壮年で優勝、東先生・小串先生は壮年Ａで準優勝であった。他のクラブとの対抗戦も計画しているが、その機会を得ない。本年度中におけるクラブ内外の試合は次の如くである。

７月１日　部内例会＝黒崎プリンスホテルコート
８月19日　創立記念文月杯大会＝安川電機コート
９月30日　シルバークラブとの対抗戦＝市営三萩野コート
10月14日　関門三地区対抗戦＝下関市共栄土建コート
12月９日　納会＝三萩野コート

昭和59年の第11回全日本医師テニス大会で高壮年ダブルス優勝、相良氏と組んで

以前からの会員は段々高齢化しつつあるが、この２～３年、若い会員の参加を得て新しい力を発揮しつつあるのは頼もしいことである。試合後は宴会を行い、飲み、語り、歌い、おどる。これもまた大なる楽しみである。

私自身はモーニングテニスに通っている。夏は午前５時半に目ざめる。堺町の角で通りがかりのタクシーを拾う。コートまで約５分である。既に２～３人の仲間がきている。柔軟体操をして練習に入る。ストローク、ボレー、スマッシュを練習し、身体のほぐれたところで、ダブルスの試合を行う。時にはシングルスまたは変則ダブルスを行う。２～３セット後、午前８時前に練習をやめ、コートを清掃して談笑しながらコートを去る。

神岳川ぞいの道を歩いてかえる。右後方に足立山を望み、右手の川を泳ぐ大小さまざまな魚群を眺め、朝の太陽を浴びながら歩くのは爽快そのものである。

足立中学に近づくにつれ登校の生徒がふえる。正門近くなると体操の先生と思われる体格のよい若い先生が立って「おはよう」と生徒に声をかけている。生徒の声は小さい。小生も大きく「おはようございます」と挨拶して通る。読売新聞の壁新聞の大見出しが目に入る。帰宅まで所要30分である。シャワーを浴び朝食をとって診療に入る。これがモーニングの日課である。今年は天気が多かったせいか、３月から11月まで56回を数えた。

常連は月守、大庭、田畑、吉岡、河田、奥の諸先生に、小生及び医師会外の安部、原田、中村の諸氏である。技術の方は一向に上達しないのに、体力の方がだんだん下降線をたどっているが、出来る間は続けたいと思っている。思う様にはならぬが、足腰をきたえて、前へ出ること、腰をおとすこと、早くかまえること、ふみこんで打つこと、グリップをしっかりする事等を心懸けている。

全九州にも努めて参加する様にしているが、いろんな都合で出場出来ないこともあり、多くは1～2回戦止りで、成績は香ばしいものではない。然し全九州は我々にとって大きな年間目標であり、多くのなじみの先生方とお会いするのはこの上ない喜びである。

25周年を迎え、御同慶の至りであり、益々この大会が隆盛となり、また諸先生方がテニスを通じて親交を深め、健康の増進に資せられんことを祈ってやみません。

テニス自分史

江島　一至〈北九州市・小倉〉

私がテニスを始めたのは、開業（昭和43年）して1年後のある日偶然、脚力・体力の衰えに驚かされたからです。始めは体力と健康を保つ目的で、当時4面だった古い三萩野市営コートでされていた小倉ドクターズのモーニング・テニスに入会させて戴きました。以来20年、下手なテニスに夢中になり、今では生活の一部に深く溶け込んで、テニス抜きの人生は考えられない程です。テニスをやって本当によかったと思います。

体を動かす事なら何でもよかったのにテニスを選んだのは、手近な所に機会があった事が大きな理由ですが、振り返ってみると、それ以前にもテニスに親しむ機会が色々あった事が誘因になっているようです。

昭和20年、予科兵学校の生徒館の前で土曜日の午後に軟式のボールを打って遊んだのがラケットを持った始めでした。中学（修猷館）では球技と言えばもっぱらラグビーでしたが、予科兵では野球とテニスで、野球をしたことがない私は、初心者ばかりのテニスのほうがとっつきやすかったのです。（その頃、同級生は学徒動員で日田の山中にあり、食料難と戦いながら20ミリ機関砲を作っていたのですから、本当は申し訳ない話です）戦後、中学に復学しましたが、戦災で久留米に転居して通学に不便だったのと、年度途中で教科書が揃わぬ上に理数系は兵学校で先に進んでいた為殆んど出席せず、近所の砂だらけのコートで、裸足で軟球を追って足の裏に「ちまめ」を作ったこともありました。

初めて硬球を打ったのは大学の時で、休講の時間に衛生学教室裏のコートで遊んでいました。しかしコーチする人もなく、時間も少なくて、技術的には初心者のままでした。

当時の仲間は、同級の花田（唐津日赤）、国見（枕崎）、森下（福岡）、富重（広島）、富永（飯塚）、古沢（福岡）の諸君や、一級上の内田（九州労災）、朝永（名古屋）先生等でした。

一内科に入局した時は木村（登）、服部、兵藤とテニス愛好の先輩が多く、中でも当時東公園のクラブでレッスンを受けた中村（元臣）先生の華麗なスマッシュは今でも目に残っています。

正式の試合としては一外科との対抗戦で花田君と組んで後藤（筑豊労災）入江（福岡）の両先輩の後を受けてNo. 4で出場し、逆転負けをした事が一回あるだけです。それでも練習試合の後、病棟の風呂に入って、それからまた夜遅くまで仕事をした事等が懐かしく思い出されます。

その後暫くはテニスから遠ざかっていましたが昭和44年から少し身を入れてテニスを始めました。当時小倉では竹末、板家の両巨頭が全盛で全く歯がたたず、当時ペアーをくんでいた大庭先生と5年で追いつこうと話し合ったものですが、テニスはそんな甘いものではなく、未だに後塵を拝しています。始めて暫くは面白くてたまらず、一試合毎に課題が増えて、朝から晩までテニスの事ばかり考えていた時期もありますし、全日本ドクターズや旧制高校戦に出掛けて行ったのもこの頃です。

大庭先生の独特のロブにはなかなかの威力があって、全九州ドクターズではB級出場4回目位に東公園のコートで優勝させて頂きました。そのコートも県庁の新築で今は無く、通りかかる度に懐かしく思い出します。

A級になると流石に壁が厚く、いつもコンソレかレコンソレに回って2～3ゲームで全日程を終わり、後は専ら応援するのが仕事でした。やって

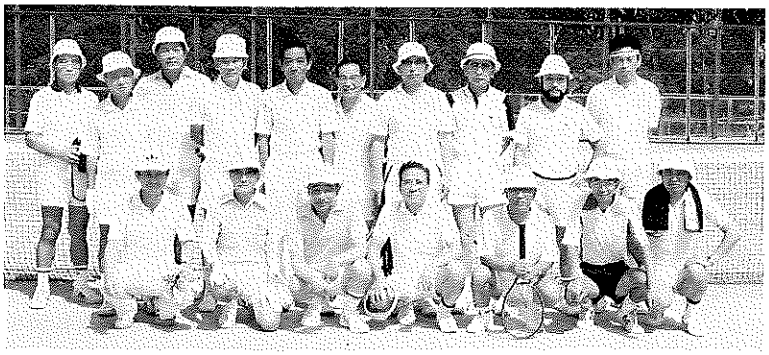
もやってもぜんぜん腕が上がらず、少し熱意が醒めかけた頃、色々な用事が重なり、モーニングテニスにも御無沙汰する結果になりました。

昭和62年4月アキレス腱を切って10ヵ月のブランクがあり、その後は全くの「健康テニス」で、専ら汗をかくことが目的になりましたが、平成2年春の第49回大会で、久留米の中川教授の剛球に助けられて、殆んど何もしない内に思いもかけない優勝をさせて戴き、続いて秋の第50回でも、秋武先生の定評あるストロークに支えられて、メロメロになりながら中島・横光組に辛うじて勝たせて貰って、春・秋連続優勝させて戴いたのが何よりの記念になりました。

これからも楽しく汗を流したいと思いますので宜しくお願いします。

足腰が動く限りはラケットを放さない

河田　藤治〈北九州市・小倉〉



1986年夏の小倉医師会テニスクラブ例会（直方・いこいの村）

さっそうたる？わがテニススタイル

幼い頃、我が家に茶色っぽく変色した古いラケットが四角の木のプレスにはさまれて壁にかけてあった。しかし父がラケットを握ってボールを打つのを見た記憶はない。既にかなりのビール腹で父は釣りに夢中で竿の手入れが楽しそうだった。

大牟田の繁華街から東を望むと小高い丘の上に金比羅神社がある。戦前、そのすぐ南に炭坑の町にはそぐわない大きく聳えたつ瀟洒な洋館があった。皇族もお泊りになったという三井の迎賓の館であるが、戦災で焼失した。その洋館とその東側にある三井鉱山の山の上病院の間の凹地に金網のフェンスに囲まれたテニスコートがあった。2面あったように思うが記憶はさだかでない。この附近は私達子供の絶好の遊び場で、コート内でもよく遊んだが、大人の練習時間とずれていたためか、実際に病院の先生達がプレーするのを見た憶えがない。今から思えば残念なのは、全九州医師テニス協会長、中島定次先生は当時三井病院の外科勤務の頃だったと思われるが、先生の素晴らしいテニスを垣間見ていたら、私のテニス人生もかなり違ったものになっていたのではないかと思う。今のような我流の固まりでなく、もっとスマートなテニスが身についたのではないかと残念である。

このテニスコートは第二次世界大戦が始まると間もなくつぶされ、深く十数米も掘り起こされ、コンクリートが流し込まれて、病院の患者退避用の大規模な防空壕が作られた。そしてB29による数次に及ぶ焼夷弾攻撃、爆弾攻撃から入院患者を護る役割を果した。

中学時代、夜明けが早い夏頃だったと思うが、近所の友人数人と朝早く起床して市役所裏のテニスコートで軟式ボールを打ち興じたことがあるが、あまり永くは続かなかった。モーニングテニスのはしりともいえるが師匠もなく無茶苦茶流だった。

九大耳鼻咽喉科教室へ入局したところ、裏の方の研究棟や病棟の間にペンペン草の繁ったテニスコートがあった。当時の河田教授は俳句や絵画が趣味でスポーツは苦手だったようだった。教授の目を盗みながら、同好の士を集めて、暇をみては草むしりをしたり球打ちをしていたが、あまり大っぴらにはやりにくかった。その点大っぴらに練習ができる三宅外科の教室員が羨ましかった。医学

部内で年一回行われる教室対抗戦では当然の如く、一回戦敗退の常連だった。

その後、ゴルフブームに巻き込まれ、熱中していたが、そのうちにスライス病になり、足腰の衰えが気になり基礎鍛錬の必要性を感じた。ジョギングも考えたが興味はあまりわかず、三日坊主で終りそうなので止めた。楽しんで出来るテニスならば、永続きするだろうと再挑戦することにした。

ラケットを握ってみて、数分板打ちしたところ、のどはカラカラ、足がガクガクの有様で、体力の低下を痛感させられた。

その後十数年経っても腕は未熟で、無念の想いの繰返しであるが、体力作りを兼ねて今後も足腰が動く限りはラケットを離さない積りである。

ピットインして考えること

吉岡　俊夫

〈北九州市・小倉〉

冬の暖かな太陽の光の中で、生き生きとしてテニスに興ずる男達をコートの蔭からじっと焼くつくように見ている男がいる。

深いロブをうまく相手コートに打ち返してネットにつく。然し相手は一枚上手だ。ネットを越えた球は鋭く沈みローボレーで返した球は無情にもネットしてしまった。

「何と下手な腕じゃんか」と呟いてしまう。「こんなの見ていられるか ――」。決して下手なテニスではないのに、こう言いたくなる鬱々とした気持が、やりどころの無いひどい言葉となってとび出てくる始末だ。

何と荒れた気持なんだろう。誰に説明されなくとも自分が一番わかっているんだ。

このイライラした気持を解決する方法は、テニスをするしかないんだ。

然し、今はテニスが出来ない。何と腹立たしいことか。過去20年間テニスを続けてきて、テニスが出来なかった日は2週間しかなかった。それは約10年前、テニス練習中に右上腕二頭筋が断裂した時と、眼底出血して片方の中心視力を失った6年前の2回のみだった。然し、その時と言えど、わずか各2週間で無理矢理テニスをはじめた無茶な男であった。

今回のこの腹立たしい原因は平成2年12月9日、小倉医師会の納会の試合中に起こった左腓腹筋の皮下断裂だった。

この日、私は何故か異常に燃えていた。試合前3日からうまく調整が出来て、当りに当っていた。その当りは約10年前の私の全盛期時代に匹敵する当りだった。この朝、ラケットを何故か忘れて出掛け、大急ぎで引き返してコートに戻り、禄な準備運動もせずに軽い練習のみで試合にのぞんだ。そして筋断裂を起してしまったのだ。常日頃、誰よりも充分な準備運動をしてきた私だったのに、何と愚かなことであろうか。

当りが良いことで勝つことに焦った訳でもない。燃えたことで気持がうわずって、充分な準備運動をする気持になれなかったとしたら、何と若く浅はかなことであったろう。

この日はパートナーにも恵まれた。第50回と前回の第49回全九州ドクターズテニス大会の高壮年A組に優勝された江島一至先生と組み、本戦リーグ戦に全勝（3勝）したのだが、3勝目の試合の後半サービスをした瞬間左下腿内側にボールが激しく当ったようなショックを感じて激痛が走った。あたりを見廻してもボールは見当らず、すぐ筋断裂と悟った。あと2本サービスをキープすれば終るんだと痛みをこらえて、相手に悟られず鬼となってファーストサービスを入れた。

本戦が終り残りの2試合も組合せよく、これならば今日は全勝出来ると確信でき、コートをおりんとしたが最早まともに歩けなかった。みすみす優勝を放棄して跛を引き引き自宅に向ったのである。口惜しい限りだった。

扨て、整形外科医で、かつ日本整形外科学会認定スポーツドクターでありながら、スポーツ中に自らの下腿筋の断裂を起すなんて、全く恥かしい限りである。穴があったら……ではなく、テニスコートに穴をあけてはいりたい。この災難の為、年末年始は暗い日の連続であった。膝屈曲、足関節伸展位での下肢固定の為、寝苦しい夜が続いた。

いつもの正月ならば、雨でなければコートに翔んで行って日没までテニスに興じたであろうにと

地団駄踏んだ。正月から狭い書斎に閉じ籠り、抽斗の中を整理してみたり、集中出来ないのに本を読んだりで明るい日々はなかった。そして反省、反省の日が続いた。

想い起せば約6年前、何の病もないはずの体に突然異変が起った。辞書の字間が妙にあきがあることから、この辞書は何とひどい欠陥商品かと思いきや、自分の目に欠陥があることがわかったのである。片側の眼底黄班部の出血が起っていたのだった。

それから数年間の治療の甲斐なく片側の中心視力を失い、テニスをやめようと決意した。然し元々、じっとしていることの嫌いな性分、ゴルフなど蝿のとまる球を打つ競技にはむかぬ。迷っていたところ、名プレイヤーで名高いY氏に相談したら、「グランドストロークがどうにか出来るのなら、今更ネットにつめて見えにくいボレーをしなくともプロになる訳ではないのだから、グランドストロークにだけ徹してテニスを楽しんだらどうですか」「ストロークだけで結構パッシングもロブもあるから充分相手を苦しめることが出来ますよ」と楽観した説明と慰め方をされたのである。

以来、再び昔に戻って連日の早朝練習、土、日、祝日のテニスを楽しんできた。何も試合に出て勝とうと思わなくても「テニスの出来る幸せ」に酔えばよいのだと悟ったのである。この動きまわれない体で平成3年の正月を迎えて年頭にあたり考えたことは、今年も先ず健康の為のテニスに徹すること、とにかく出来る丈テニスを続けられる体を維持することにあると思う。

小倉の東先生から、いつも全九州大会に出場しないとお叱りを受け続けているが、そろそろ枯木も山の賑わいと、勝ち負けは別としても出場しても良いかなと考えたりしている昨今である。

20年間、まさにどれだけ貴重な時間をテニスにかけたのか恐しくなる程である。土曜、日曜、祝日、正月、盆とテニスをしない日はなかったかの如く、妻から恨みつらみを言われ続けた。幼い子供達ともろくに遊んでやらず、「健気な未亡人の如くに子供を育てました」と彼女は呟く。脚が悪くなって暇が出来て何処かへ車で行こうかと誘っても、「20年間放ったらかしにした付けを今頃チャラチャラ小出しに返してくれても、もう遅いわ」と言う。放ったらかされた妻は「自分の楽しみは自分で何とか見つけ出しました」と言って、屋上で植木を育て、メダカをたくさん飼い、刺繍に情熱を燃やしている有様だ。『脚が悪くなったついでに、一緒に第九交響曲の合唱に出る練習をしましょうよ』と誘われ続けているので、これから逃れる為に何としても以前の強い脚に戻すよう鍛錬をしたいと心に決めた正月であった。

テニスは楽しく…　奥　共栄〈北九州市・小倉〉

本当は全九州テニス大会の優勝の思い出などを書きたいのですが、テニスの下手な者には残念ながら書けません。テニスは勝つためではなく健康の為と思ってやっています。2～3年前から医師会テニスにいれてもらって練習をしています。

日曜、月曜、休日以外行われており、私は朝5時頃、目をさまし「アイタタ」と言ってベッドに腰かけ、「ドッコイショ」と言って立ち上がり、ヨロヨロとパーキンソンのような歩き方でトイレへと行きます。早朝テニスにいきだして足腰がこわばり、このような状態で起き出します。それから準備体操として、NHKの医学講座で覚えた腰痛体操を行い、次に真向法をして、友人から習った腰痛のツボである土踏まずの所を強く押して、準備完了、これで足腰が軽くなります。

いよいよこれから自動車でテニスコートにいきますが、早朝は車が少ないが、非常にスピードを出していたり、信号無視などもあり危険です。コートに着くと既に早朝野球、ジョギングなどする人でざわついています。

小倉の早朝テニスをする人も段々少なくなり、8人揃って2面使える事はめったにありません。年齢も私の49歳が一番年下です。

そんなある日、白髪の老人（以前早朝テニスに参加していたことがあったそうです）がフラリとやって来て練習を始めました。人数が少ないので1人でも多いのは歓迎です。しかし試合が始まるとその老人は何かブツブツ言い出しました。なに

が気に食わないのか、君達はテニスのエチケットを知らないと文句を言い出しました。

「ボールを返す時はワンバウンドで相手に届くようにしなさい。転がすと土がついて汚くなる」

「サーブをするときはカウントをコールしてからしなさい」

私達も一時は言うことを聞いていたが、つい忘れてしまいます。すると老人は怒って

「私は数十年テニスをしている。君達よりもルールも知っているし、テニスも上手だ。言うことを聞きなさい」

言うことは間違っていないが言い方が悪く、とうとう喧嘩になってしまい、その人は帰り再び来なかった。

この老人がラケットをもって町中を歩いているのを、時に自動車から見ることがあるが、今でもきっとブツブツ言いながらテニスを楽しんでいるのでしょう。

貴重な1勝

岩本　皓
〈福岡県・京都郡〉

昭和37年、医局に入り、現在鹿児島で大活躍の入部氏よりテニスの手解きを受けた。七月の炎天下、午後3時ごろより練習を始め、暗くなるまで水一滴飲まずに頑張り、手術場の風呂に入るのももどかしくビヤホールに駆け込む。何ともこんなうまい物はなかった。翌朝は二日酔で、頭の痛さも大したものであった。

こうした花々しい事始めであったが、一年もすると、ほとんどテニスとは縁が切れてしまった。昭和52年郷里で開業、テニスを再び始めたいと思っていたところ、門司の岡崎先生より、ドクターズテニスを勧められて、飯塚の大会より出場、悲しくなる結果であった。翌年より行橋の佐藤氏に無理にパートナーになってもらい数度の九州大会に出場したが、今一歩のところで必ず失敗をするので愛想を尽かされ、離婚宣言をされてしまった。

このころ小倉医師会のテニスクラブに入れて戴いた。九州大会には、小倉医師会の巨砲、ドクター前田とペアを組んで出場した。私は前田氏のみに戦わせ、楽々勝利の栄冠にあずかることにしていたが、敵は私のみに集中砲火を浴びせて、戦艦、前田山の巨砲も使うことなく惨敗した。この時前田氏よりテニススクールをすすめられ、通い始めて4～5年になるが初級から全く昇進しない。

こんな具合であるので、大会では勝った覚えはない。平成2年の三地区対抗戦で、岡崎氏に助けられ貴重な1勝をして大いに気を良くしている。

下関に行くのにわざわざ門司港まで行き、武蔵気取りで、渡しで海を渡り下関に上陸した。何とダンディーであることかと自画自賛である。

〈富士〉の自由金利型定期預金

〈富士〉の自由金利型定期預金は、大口の資金をより効率的に運用していただくための貯蓄です。お預け入れ金額は1,000万円から。自動継続をご利用いただければ、便利で有利な長期運用が可能になります。大口資金を有利に安全にふやす〈富士〉の自由金利型定期預金。まとまった資金の運用にぜひご利用ください。

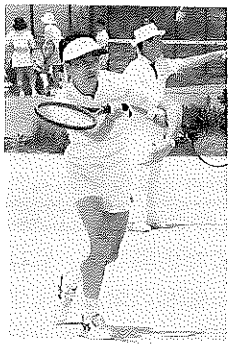
FUJI BANK
門司支店

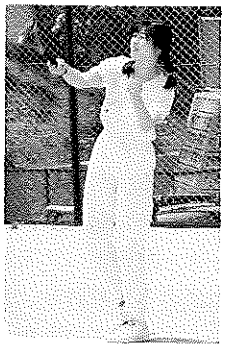
八幡医師会テニス同好会の活動とスポーツ雑感

松永　等

〈北九州市・八幡〉

平成2年10月の八幡医師会同好会第6回大会





◀がんばっています

八幡医師会のテニス同好会の活動は、諸般の事情から一時中断していましたが、折からのテニスブームの到来もあって、昭和62年6月より復活しています。現在、春と秋に2回の親睦試合を行い、本年10月に第6回大会を終えました。毎回25～30名の参加があり、和気藹々とした雰囲気の中で思う存分にテニスの醍醐味を味わえるように企画運営しています。会場はテニス場の支配人や事務長の好意もあって、毎回、産業医科大学近傍のウエストサイドテニスクラブを使わせて貰っています。参加者は医師会会員の他に、奥様方や栄養士、薬剤師、検査技士、看護婦等と職種も多彩で、殊に若い女性の参加が多いために明るく華やかなムードに包まれています。なるべく各チームの実力が伯仲し、好ゲームになるように試合の運営には大変気を配っていますが、仲々神経を使います。試合は男女2名ずつの4人1組の団体戦で、ダブルス。しかも男女のミックスペアになることを原則とし、ポイントゲット方式で順位を決定しております。殊に試合後の懇親会では毎回辛辣な批評や珍プレーをめぐっての解説がとび交い、終始笑い声が絶えません。最近では常連の皆さんの腕前もぐんと上り、随分レベルが上ったと喜んでいるところです。ただ、御存知のように、今、八幡医師会が会館と看護学院を建築中で、この為の緊縮予算を組んだせいで、同好会活動に対する助成金が半分に削られてしまいました。しかし折角盛り上ったこの活動を維持するために、今後も知恵を絞りながら努力する所存です。

スポーツと水分摂取

我々が小学生や旧制の中学生だった頃には、スポーツ中は勿論、スポーツ終了直後に水分を摂取することは腎機能を傷めるとして厳に禁じられておりました。しかし現在のスポーツ施設には必ずと言って良い程各種スポーツ飲料の自販機があり、スポーツ中に給水することはむしろ常識となっています。マラソンやトライアスロンのように激しい体力の消耗を伴うスポーツ競技では、エネルギー補給を含めて、途中での給水の量や何をどのくらい添加すればよいかという問題もあります。余り濃厚なビタミンや糖分を加えると却って胃腸に負担がかかることになり、スポーツにとってマイナスの要因となりますが、実は未だこれらの事に関して、スポーツ医学での確立されたデータや定説はありません。現実には各選手やコーチの経験や好みによって、各人各様のドリンクが用意されており、精神面での多少の被暗示性も加味されています。また、時折りランニング中に選手が脇腹を押さえて苦しんでいる姿に接することがあります。サイドスティックと言われるこの脇腹痛に関しても未だその原因はよく解明されておりません。しかし、いくら水分補給が大切だからと言って、一度に余りに大量の水を飲むことは水中毒等のトラブルもあり、やはり体を傷める結果となります。

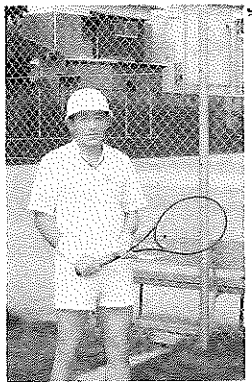
骨と筋肉について

骨折や外傷で患者さんをギプスで固定したり、局所の安静を保持していると短期間のうちに筋力が低下したり、手足が細くなって来ます。骨にも脱灰が起り、レントゲン写真では、骨折部ばかりではなく、その上下の関節部までカルシウムの量

が減って来ます。筋力やカルシウムの減るスピードはまことに早くて、これを元に戻すためには倍以上の時間と訓練が必要になります。ですから我々整形外科医は、高齢者であればある程なるべく治療の早い段階から、患者さんを動かせるよう常に工夫を重ねています。

宇宙旅行でもカルシウムの減量が起るそうですから重力も大いに関与しているものと思われます。我々の経験では、膝上の大腿の筋肉が周径で僅か1㎝だけ減少しても、これを復起させるためには少くとも1ヶ月以上のトレーニングが必要である事が分かっています。このことは週1回1～2時間の運動では現状維持、筋力アップや機能増強のためには週2回以上のペースが必要であると言われる所以です。

また筋肉には速筋といわれる白い筋肉と、遅筋といわれる赤い色の筋肉がありますが、年齢と共に先に衰えるのは速筋の方で、赤筋の筋力は余り変わりません。つまり若い人にはスピードでは勝てませんが、技と粘りでカバーすればある程度は通用するということにもつながります。カリウムの補給には食品の中でバナナが有効であることは良く知られていますが、スタミナのためには蛋白質よりむしろ糖質が効果的で、昔からある力餅というものには案外先人の知恵が込められているのかも知れません。



テニスと自転車

和田　暢夫
〈北九州市・八幡〉

前から話はありましたが、八幡医師会テニス同好会は昭和58年8月21日発足しました。当日は好天に恵まれ、約21名のメンバーが集まり朝10時頃から夕方6時半頃まで楽しく過ごすことができました。またアフターテニスのパーティーで発会という次第。会員の構成はＡＢ会員、家族従業員を問わず、またＡクラスから初心者まで、ほぼ20数名の参加があり、春秋の年2回、日頃の腕を披露することになっています。まだ対外試合ということはありませんが、そのうちには、やってもよろしいかと思っていますし、機会があればテニス旅行などもやりたいものと思っています。

私のテニスライフは50歳を過ぎてから始まりました。半年ばかりは肘痛、肩痛、肉離れ等に悩まされましたが今は何の故障もなく、楽しむことができるようになりましたが、ちょっとした契機で自転車の味を覚えました。こちらは60歳過ぎてからのことで、転倒を繰返した後、今は5～60キロを軽く流せるようになりました。これも私が車に乗れないため、テニスコートまで行くために始めたものですが、テニスと自転車では膝の使い方が大分違うことが分かりました。ロードレーサーに魅力はありますが、年を考えて細いタイヤのツーリングタイプがもっぱらです。ラケットを取り付け、時に遠出をして他のテニスクラブを覗いてみるのも楽しいものです。医師会テニスには何年も参加していませんが、今はテニスよりも自転車を乗り回すのが最高に面白いという現況です。

塩野義製薬株式会社
大阪市中央区道修町3-1-8　〒541
電話 06-202-2161

テニスについて思うこと

浦上　陽一〈北九州市・八幡〉

何か共通するものを通して、それを話題にすることにより、全く知らなかった者でも、また古いつき合いの者でも話がはずむことは素晴らしいと思う。誰か言う“たかがテニスされどテニス”。

私とテニスとの出会いは、大学時代からだ。

ただもう身体を動かし、走り回ることが主体だったように思われる。毎日やってもやっても上達しなかったが、がむしゃらにやっていた。

昭和40年代までは、チルデンからローズウォールに至るイースタングリップが主流であった。本屋をあさっても、今日のように指導書も雑誌もほとんど見当らなかった。コーチにおいてもしかり。ただ夢中で練習するだけ。今にして思えば、その時もっと基本を身につけていればと残念に思う。

大学を卒業すると、周囲には仲々テニス相手は見当らず、10数年間中断していたが、10年前開業した病院の近くにテニスクラブが出来、診療の合間にラケットを振り回しているうちに、次第に相手も増え、今では週１～２回はコートで汗を流し楽しんでおります。

病院の裏庭ではねつきテニスをしていた２人の息子達も、今では大学で本格的にやり始め、休みに帰省した折など、妻や末娘を交えての家族５人で楽しむひとときは、診療に追われる日々のほんの少しのやすらぎになっています。

子供は若さでめきめき上達している様ですが、私は早いもので50歳を迎え、今一つ無理が効かなくなったように思われます。しかし、月刊誌などを購入しては、ポイント指導など取り入れて、頭脳プレーに挑戦している昨今です。

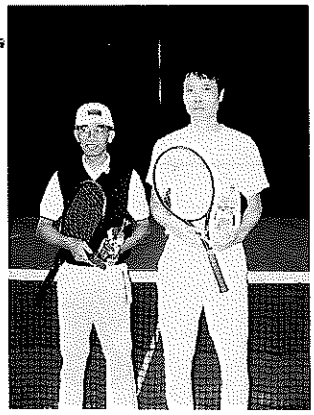
テニスを全く中断していた間、単独で出来るゴルフを始めて、今は仕事とテニスの合間に時々ゴルフの練習をしています。練習場のオーナーは一流で、適切なアドバイスをして下さいます。止っているゴルフボールを打つのに、いかにヘッドアップが多く、当る瞬間までボールを見るのが難しいかを思い知らされます。やっとこのごろ、10回打って１～２回、アッ、今、クラブヘッドが抜けたな、ボールが見えていた、と感じることがある位です。よくスポーツアイと言われるけれど、その域にはほど遠いのですが、ボールを見るとはこれなのだ、と実感しています。テニスでも同じことだな、ラケットは大きいけれど打点まで本当にボールを見ることはこれだな、と感じています。これを生かすことで、少しでもテニスが上達するのではないかと期待しています。

下手の横好きテニスでも、家族ともども相手して下さるテニス仲間の人達に感謝し、五十、六十の手習いよろしく、少しでも長くテニスをしたいと思っています。

福岡との対抗戦を望む

北九州勤務医テニス

小串　俊雄〈北九州市・戸畑〉



見事準優勝、山元先生（右）と筆者

北九州における勤務医のテニス大会が1990年に発足しました。

福岡市では数年前よりおこなわれており、北九州でも始めようと門司労災病院の田中晃一先生の発案があり、５月に第１回が北九州プリンスホテルコートで、９月に第２回が北九州パレスコートでおこなわれました。

発案者の田中先生は腰痛がおこり参加できず、新小倉病院の前田省吾先生と私が世話人となり、

参加者は第１回は26人、第２回は18人でした。

中間市立病院の馬渡先生（1955年卒）から九州厚生年金病院の石川先生（1989年卒）まで広い年齢層の参加者でしたが、予想より少ないように感じました。まだ不慣れなため案内が行き届いていないのかもしれません。次回より広く呼び掛けるつもりです。今後春秋年２回行う予定です。多数の参加をまっています。

試合形式は第１回はトーナメント方式、第２回はＡ、Ｂと分けてリーグ戦をおこないましたが、成績は下記の通りでした。

私は勝本先生、山元先生と組み、苦戦の連続でしたが、年の功 でいずれも準優勝することができました。

第２回の９月２日はまだ残暑がきびしく、真夏のような暑さで、リーグ戦のため皆さん相当きつかったとおもいます。

今後ますます盛りあげて、いずれ福岡と対抗戦が出来たら面白いのではないかと思っています。

福岡の先生方よろしくお願いします。

第１回　５月12日　北九州プリンスホテル

優勝：松本尚浩（新日鉄八幡）
　　大森久光（　〃　）
準決勝：勝本富士夫（市立小倉）
　　小串俊雄（市立戸畑）

コンソレ
　優勝：橋口重明（市立小倉）
　　西井章裕（　〃　）

レコンソレ
　優勝：益田幸行（門司労災）
　　白澤健蔵（　〃　）

第２回　９月２日　北九州パレス

Ａ優勝：寺井　勉（小倉記念）
　　塩出宣雄（　〃　）
Ａ準優勝：山元明治（市立戸畑）
　　小串俊雄（　〃　）
Ｂ優勝：野村秀幸（新小倉）
　　平方良輔（　〃　）
Ｂ準決勝：斉藤猛彦（市立松寿園）
　　横山　哲（住友生命）